

金髪碧眼の魔族と援助交際
少女は触手まみれのしないと生きていけない



金髪碧眼の

少女は

魔族と

援助交際

しないと
生きて
いけない





ズグ
ズグ

ズグ
ズグ

ズグ

Blight♡

口の中に入り込んだ触手から、
射精されました。
やや揮発性と甘みのある
アルコールのような精液が
口の中に痺れをもたらすと
私はプレイで七回目の
絶頂を迎えました。

ゴキウゴキウ...

ゴキウゴキウ...

ゴキウ...

ゴキウ...

ゴキウ...

♡♡♡♡♡



最初は痛かった突起がある触手も
何度も中に出され膣が蜜壺に変わると
快感以外何も感じなくなっています。
私は魔物とセックスし
女の悦びを感じ浸っているんです。

触手は膣奥まで入り込むと興奮したように何度もうねり、私の中に精子を吐き出します…その度に私の愛液と混じり合った精液がドロリと落ちていきました。

あ♡
水この
キルマ♡

触手は待ちきれないと何本も私の身体に巻き付いてきます…でもアナルは入ってきません…私との援助交際契約においてアナルは絶対NG項目なのです。

魔族は契約は守ります。

魔族は闇に生きています。
昔は闇で数多の女の子を捕らえ犯しました。
世界に闇が多くそして魔族は強かったから…
でも時代は流れ、夜も街灯で明るく
監視カメラが見張る世界は、
彼らが紛れる闇を消しました。

さらにヴァンパイアハンター、退魔師、エクソシスト、そして銃火器、
人類は魔族を駆逐できるほど強くなり、そして闇を消したのです。
魔族はその存在を守るため、人類と密約を結んだのです。

人類は害さない、契約においてのみ関わる。



魔族は人間に危害を加えられなくなりまし
でも魔族には本能ともいえる欲望があり
彼らは女の子を性的に捕食しないと
生きていけない：
そこで必要なのが契約です。



魔族は契約を結んで女の子とエッチするようになったのです。
私が会員登録してるマッチングアプリは退魔師協会の監視下にて、
女の子と魔族をマッチングし契約エッチするためのアプリなのです。
そうすることで女の子の安全と魔族の監視を同時に行っているのです。
だから私は安全に魔族と援助交際が出来ているわけです。

女の子はなぜ魔族と援助するのでしょうか？
魔族は普段は人間として暮らしている方が多く
報酬も決して多くないです。
普通のオジサンとのセックスと
同じくらいの額ですね。



まずアプリがある事を普通の女の子は知らないわけです。
知っている時点で魔族の関係者であるというケースが多いですね。

私の場合は祖母がドイツ人で魔女でした。

祖母は魔王と呼ばれる悪魔に血を分け与えられたのですが…

その血が私に受け継がれ15歳の誕生日に覚醒しました。

その日から私は魔族とセックスして

魔力供給されないと生きていけないのです。



百回精液をかけられシャワーを浴びてきた私に、
魔族としての欲望を吐き出して
人間に戻った彼は言いました。

「人間としてお前と

もう一度セックス

したい。」

人間としての

セックスは

裏オプション

ですと

伝えると

彼は喜んで
万札をもう一枚
添えました。

「NGは一緒です♥

それ以外はご主人様のお気に召すままに...。」

私の中の魔女の血は、魔族に使い魔として仕えるためのもの

だから私はいつもセックス中は相手を「ご主人様と呼びました。」



ベッ... ジゅ ジゅ

ん♡

まだれ♡
らゅ♡

ヒュールル

彼の大人の性器は
私の絞めつける狭い膣内で
一回目の射精を終えました…。
生で中出し：私は望んでそれを受け入れています…。
ひとりの人間としてその快樂を望んで…



ゴトゴト

んん♡
↑↑あす♡

あ♡
↑↑♡

彼は人間としても3回私の中に射精し、私は5回絶頂に達しました。

私は彼のサーフィンで鍛えているという人間の身体を見た時からセックスしたいと

思っていたので大満足。

そして魔族の射精によって

私は魔力供給され数日延命できる

わけです。

本物の主ではないので

かりそめの魔力供給な事を彼と事後に

雑談すると…。

彼は自分が主になると言い出しました…。

でも私を使い魔として従えられる器の魔力の主では

彼はなかったたので丁重にお断りし、

その日の援助交際を終えました…。



よかったよ♡

いはい♡
いましました♡



あ♡

まだ♡
らめ♡

アノ

アノ

魔族は普段は人間として生活しています。その魔性を我慢しながら…

だからセックスの時、

すでに限界に近いことが多い…

つまり、入室して即セックスが基本です。

だから私は、援助交際の時、

必ず事前にゼリーを入れて膣を濡らしています。

でもこの方の場合、挿入はゆっくりと

お願いしています。

あまりに大きすぎるのです…。

「どうした？アンナ…」

「こんなに感じまくって濡らして？」

「何を待ったんだ？」

私は基本的に援助交際の際は、匿名です。

でもこの方は、私の名前を知っていますし、

私もこの方を知っています…つまり…

「先生のおちんち…私には大きすぎます♡」

「ゆっくり…ゆっくり…お願いします…。」

この方は学校の体育の先生…少し怖いところはありますがいい先生です。

魔族はあらゆる場所に人間として潜んで生活しています…。

私達もマッチングしなければお互いの本性は知らなかったわけです。

せんせっ♡まっ♡
せんせっ♡

じゅっ♡

じゅっ♡

じゅっ♡じゅっ♡じゅっ♡



おん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡
せんせん♡

ニロク...

ニロク...
ニロク...

ニロク...
ニロク...



先生は

キノコ型触手の

一番太いモノを

私の膣に挿入し

ゆっくりと膣を

かき混ぜるように

回し続けます。

私は何度も何度もイキ

それに合わせてドクドクと

先生は精液を流し込みます。

先生の触手は私の性器の気持ちいいところも

苦手な所も全部押しつぶすように太く

私は苦しさで気持ちよさと

全てが入り混じったような

先生とすることではかわえないセックスに、

悦びを感じっていました。

♡♡♡♡♡

びゅん

ドビュン
ドビュン

ぐんぐん

びゅん



触手は口の中に
入り込み、

私は舌を這わそうと
動かしますが、

その前に待ちきれないと
触手は口の中をかき回し

喉の奥まで進んで私の口腔内を犯しました。

「アンナ…随分感じやすい体になったなあ？」

先生は魔族になっても自我を保つタイプで、

私の耳元ですっと卑猥な言葉をささやきながら

耳をザラザラの舌で舐めまわしては、

私の反応を楽しんでいます…。

ふんや♡

ドク...

ドク...

先生は膣内と

口腔内で、

その日一番多い量の

射精をしました。

喉の奥が粘性の精液で、

溢れかえり私は喉の奥へと

飲み込んでいきます。

「気持ちいいか？アンナ？」

まだ10本以上あるからなあ？

いっぱいイケるぞ？よかったなあ？」

先生は、それから普通の人間サイズのキノコを

挿入し続けて2時間ほどセックスを続けて

私の愛欲を満たしてくださいました…。

びゅる…

びゅる…びゅる…

びゅる…

びゅる…



先生はいつも裏オプシヨンの人間の姿でのセックスも求めます。

魔族も人間として生きれば人間の欲望を持ちます。

だから女生徒とセックスをしたくなるのです…。

「せんせ♥せんせ♥」

「どうしたアンナ？」

「俺が好きになったか？」

「セックス上手いですし好きですけど」

「違います♥」

「このまま」

「私が腰振って」

「先生イカせたら」

「体育の成績」

「上げて♥」

「好きと言っのは」

「もちろん」

「セックスパートナー」

「としてです。」

「私は先生に甘えるように」

「遊びを提案しました。」

「先生はそんな私に舌を絡めて」

「激しいディープリキスをして…」

「いいぞ！ガハハ」

「ヤッてみるアンナ！」

「先生は快諾して、」

「私は臍に深く刺さっている先生の男性器を、」

「刺激するために腰を振り始めました。」

せんせのキス好きです♥

わゅ♥

ト...



「せんせ…♡ああん♡

待って…今イッちやいました…

ちよっと待ってくださ…♡」

先生の男性器は

普通の人よりも大きく

私はすぐに動けなくなり

先生は…

「ホラ！

手伝ってやる！

「こうだよ！」

先生は下から

突き動かすように

私の身体を

揺さぶると

私はいくらでも

気持ちよくなり

大人のセックスを

知るので…

「せんせ♡

イキます♡

せんせ♡

今のもっと♡

ああん♡」

あ♡

ギン
ギン
ギン

ギン
ギン

私はただただ先生のたくましさ
甘えて喘ぐだけの女の子でした。
私は何度も絶頂を迎えて…



「せんせ♥頑張ったから成績上げてくださいね♥」
私は甘えた声で先生に小悪魔なお願いをしました。

「いいぞ！ただ避妊なしの
ゴム無しセックスしたから
保健体育の成績は
下げておく！」

ガハハ！

「もういじわるです！

じゃあ二回目は

ゴムありセックスですよ！」

「ガハハ！

生だ！生！

せいぜい動いて

成績下げない

ように頑張れ！」

「らめです！

今度はせんせが

上に乗って！

いっぱいイカせてください！」

「こうして先生と私は、

朝まで生セックスを

繰り返し、

翌日早朝に学校に同伴通学して

学校で内緒でキスをしました…。





お兄ちゃん♡
お♡ん♡
お♡♡♡

お♡♡♡

お♡♡♡

お♡♡♡

お♡♡♡

お♡♡♡

「お兄ちゃん…」

私の事…どう思ってます?」

「ん…アンナ?」

エサ…蟲のエサ」

お兄ちゃんは魔族じゃないです
退魔師さんです。

私が魔女の血に
覚醒し、

魔力不足で倒れて
そのままじゃ

死んじゃう時に
助けてくれた人です。

そして

私が援助交際せず
普通に体を許せる

たった1人の人です。

「お兄ちゃんいじわるです…」

私大好きなのに…」



「お兄ちゃんー！らめです！
そんなしたらイキます♡
イツちやう♡」

あん♡

お兄ちゃんは、
悪い魔族と戦うために
蟲を飼っているんですけど
蟲達は魔物なので
時々女の子を
犯さないと
ダメなのです…。
私は大好きな
お兄ちゃんのために
蟲とエッチするけど
お兄ちゃんはただ
濡らすのが苦手な
蟲達のために
私の膣をぐちゃぐちゃにする
セックスをします…。

あ♡



例えそんなセックスでも
お兄ちゃんに中に出されるのは
私にとって幸せです...。

んんん...アニー!!

んん
イキます♡

びしょに
びしょに
びしょに

んん♡
イキます♡

びしょに

びしょに

びしょに



あ♡ヤ♡♡♡
ら♡ゆ♡♡♡
イモ♡♡♡
中♡で♡勤♡い♡ん♡...
ん♡♡
お兄♡ちゃん♡の♡
精♡子♡が♡た♡に♡
出♡る♡の♡♡



♡♡♡
♡♡♡
♡♡♡

「お兄ちゃん？
見てくれてますか？
お兄ちゃん？」

いつもお兄ちゃんは興味なさげに
私を蟲に犯させます。

私は甘えた声で、
お兄ちゃんの気を
引こうとします。

お兄ちゃんは偶然に
近所に住んでいて
私は子どもの頃から
ずっと甘えてきました。
いつも素っ気ないのに
大事なときは
ちゃんと守ってくれる
正義の味方なのです…。

「大好きですよ♡
お兄ちゃん♡」



ジロボツ…

ビロキ…

「つるせえから
お前らアンナを
黙らせろ。」

お兄ちゃんが一言いうと
お利口なイモムシさんは私の口に粘糸を
巻き付けて話せなくしました。

「お前らしっかり
出しとけよ。」

続いたお兄ちゃんの言葉に
膣の中に居た
イモムシさんは、
待っていたかのように
中に溜め込んだ精液を
隙間からあふれて
飛び出しそうなほど
射精しました。
お兄ちゃんの前なので
イモムシさんで感じるのを
我慢する私ですが
限界でした…。



♡ギョ♡

ギョ・ギョ

びしょ
びしょ

「お兄ちゃん
中にいっぱい出たのに♡
お腹にもいっぱい出ました♡」

あ♡

お兄ちゃんは
必ず最後にセックスを
してください。
私がお兄ちゃんと
蟲さんたちと出来た
ご褒美なのと
お兄ちゃんだって
私みたいな
可愛い美少女と
セックスしたいに
決まってるんです。

「私もいっぱい
イキました♡」

お兄ちゃんとの
セックスは、
魔力とも
性欲とも違う
愛が満たされるのです。
お兄ちゃんだってツンデレなだけで
ホントは私として
愛で溢れているはずなんです。

「私のおまんこお兄ちゃんの
おちんちんの形に馴染んできたみたいですよ♡
入っているとすごい落ち着くんですよ♡」



「アンナ今週は3回援助交際してるだろ？」

しかも全部裏オプシヨンのアフターセックス付き。」

「ちよつと……」

何言ってるか

わからないです……」

「お前はセックスして

終わりだが

ヤツた魔族は

申告義務があつてな

アプリ運営に

セックス内容

申告してるんだよ。

中学教師も素直に

ナニしたか報告して

退魔師協会はソレ

閲覧できるんだよ。」

「お兄ちゃん？」

イジワルすぎますよ？

だって私しなきゃならないですし……

今は……ただ大好きなお兄ちゃんに

甘えたいから……。」

お兄ちゃんはDSだけど

ピロートークだけはちよつとだけ優しいのに、
すごい責められて私は少しびっくりしました。



「じゃねえよバカ！
いまちよつとタチが悪い魔族が国内に来て
何人も喰われて行方不明になってる。
それでうちら調査してんだよ。
お前だって危ないから…。」

「お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんなのに私を
心配してくれてます。」

「当たり前だろ？」

「とりあえず」

「知ってる魔族以外と」

「会うな。」

「公式アプリでも」

「信頼するな」

「死ぬぞ！」

「お兄ちゃん」

「セックスしましょ？」

「は？お前話聞いている？」

「はい…大好きなお兄ちゃんに心配されて
私の子宮はキュンキュンしてます♥」

「はい…大好きなお兄ちゃんに心配されて
私の子宮はキュンキュンしてます♥」

結局この後めちやくちやセックスしたんですが…
わたしはちゃんと真面目にお兄ちゃんの話
聞いておくべきだったんです…。



彼女は綾瀬紗江…

私の先輩です。

彼女は妖魔でもある

狐の神様を祀る神社の娘で

姉妹で巫女をしてました。

先輩は魔力を溜め込む体質で

溜めた魔力を性行為によって

神様に捧げる役割を

持っていたそうです…。

でも神様は先輩よりも

お姉さんを選んだのです。

先輩は身に持て余した魔力を

放出しないとパンクしてしまうから、

魔族と援助交際をしなければいけなくなった

私の援助交際仲間でもあるのですけど…。



先輩は
そこで
魔族に
アナルまで
深く
レイプされて
いました…。

「ごめんアンナ
スマホ奪われて…
逃げて…」

「貴女は死んじやうわ…。」

膣は受け入れる所でもあるから
膣でのセックスは魔力交換…

私と魔族とのセックスでも

私が魔力補給されていると同時に
相手に私の魔力も流れています。

でもアナルは排泄器官です。

アナルセックスはただ受ける側が
魔力を放出するのです。

先輩は魔力放出が目的だからアナルを犯されても平気です。

でも魔力供給が目的の私はアナルから魔力が流れ出すと死にます。

それが私のアナルNGの理由なのです…。

先輩は逃げるように言いましたけど…それは無理でした…だって…

ベキ

エロク

エロク…





あんな♡
ご主人様♡
大好きです♡

アッ...

ズッ
ズッ

先輩が逃げるように言った時、

すでに私は魔族に捕まって

レイプされていました。

私より凄い先輩が捕まって

なすすべなく

レイプ

されている

相手なのです。

私は抵抗をしません。

「主人様…」

今から私は

あなた様の

使い魔です…

どんな

ご奉仕でも

致します♥。」

私は甘えた声で

目の前で私の乳房に

舌を這わす魔族に

問いかけ続けます…。

膣に深く挿入された

巨大な男性器を

受け入れやすいように

指で入り口を広げて、

強姦魔に媚びています。

今までも魔族と

セックスをしてきて

危険は多かったです。

だから私はいつも相手に従いました。

それが一番安全だったからです…。

すごくです♥

ジュブッ

ジュブッ

ジュブッ

ジュブッ



「ラン…お前は
犯されている友の前で
強姦魔に媚びを売り
股を開くのか？」

「当たり前です…
強きものに従うのが
我々…」

魔に魅入られし
魔族ですもの♡」

先輩

「ごめんなさい
必ず助けます。
そう心で思い
魔族と対話を
続けます。」

スマホを操作した
と言う事は、
魔族になっても知性がある
つまり利害を説ける
そう判断しました。

「私の子宮は
無制限に魔力を
食べれるんですよ。
他の女の子と違って
魔力を注ぎすぎて
困るなんてないんです。
さあ…たっぷりと
注いでください♡」



イキます♡

またイッちゃう♡
イッ♡

おお♡♡

私の中で

乱暴に

ピストン運動

された男性器と

一瞬で膣を

埋め尽くし外まで

溢れ出す射精は

私を何度も

絶頂させて、

全身を駆け巡る快感は

私を何度も何度も

痙攣させました。

感じた演技が

必要がないほど、

魔族のセックスは

素晴らしい快感です。

そして魔族の欲望は

一回で尽きるモノではなく

そのまま次の行為が続きました。





びしょびしょ
びしょびしょ
びしょびしょ
びしょびしょ

あ♡
んんんんん
んんんんん♡

らぬ♡

今まで出会って来た魔族さんたちは優しかったんだと、私は思い知っていました。

目の前の魔族は私の懇願を全部無視して、手足を拘束して痛いほど曲げて、容赦なく触手でレイプして、苦しんでいる私に…

「そのまま

犯され続けて

死ね…」

そう吐き捨てました。お兄ちゃんは言っていました。外国で何百人も殺してきた魔族だから絶対関わるなって…。

子宮に深く刺さっている触手からドクドクと精液が流し込まれて…でも私にとつてそれはエネルギーだから死ぬことはありませんただ…

らぬぞす♡♡♡♡♡



お尻の穴に触手の先から出た舌が、
うねうねとかき分けて入ってきます。

その触手に、
お尻を

犯されれば、
私は、

魔力を失って
死ぬのです。

子宮までレイプされて
口の中にも触手が
入り込んで、

私はもう何も
考えられないくらい

頭の中がいろんな感覚で
麻痺していました。

思っていたのは一つだけ

ごめんなさい

お兄ちゃん

せっかく

心配してくれてたのに...

ん♡ん♡ん♡



やっぱり嫌だ…死にたくない！
って必死に叫ぼうとしたけど私は何の抵抗もできないままで、
アナルに深く
触手が
突き刺さりました。

死ぬこととは別に
お尻の穴に
何かが入ってくる
感覚は…

膣とは別の感覚があつて、
頭の中の痺れが
どんどん膨れて
真っ白になっていきました。

それは死んでいくからなのか
気持ちいいからなのかは
わからなかつたです。

ただ体の中からどんどん魔力が抜けて
生命力がみるみる失われていくのだけはよくわかりました。





ニャー

ずっと先輩が私を助けようと
叫んでいる声がしていました…。
でもそれをあざ笑いながら、
魔族は私のアナルを

レイプしました。

私の魔力が尽きて

飽きたように

触手達が私を床に

打ち捨てても

一本の触手を私のアナルに

ねじ込んで

レイプし続けました。

ヒェッ…

ヒェッ…

ヒェッ…

ゴッ…

ゴッ

ドクドクと私の身体の中の
魔女の血が脈打ち、身体の魔力を
探します。
でも身体にはわずかの魔力も
残っていなかったのです…。



死んでいく感覚は初めてじゃありませんでした。
一番最初に倒れてお兄ちゃんに助けられた日
身体から魂が消えていく感覚です。
でも今はお兄ちゃんはいません。
先輩…助けられなくて
ごめんなさい。
私は、
こんな身体に
なった時から、
死ぬ覚悟はできていました…。
だからいいんです。

そう思って目を閉じる私に
なぜかお兄ちゃんの声が
聞こえた気がしました。



気が付いた時には、私は手術室？
のようなどころで、ロボットから
膣に注射をされていました。

「待って下さい♡らあ…めえ…♡
お兄ちゃん…
見てないで助けて下さい♡」

「バカか？アンナ…
お前は魔力切れで死ぬ所を
科学魔族の博士に魔力注射で
助けてもらってるんだ。
俺と博士に感謝をしろ。」

「お兄ちゃんが
助けてくれたのです？
…ちよ…ほんとはめえ…
お兄ちゃんの前でらめなの！」

博士は笑いながら、私の膣に、
緑色の液体を注ぎ込み
続けていました。
注入されるごとに膣の中の
ゴム製の挿入部位が震えて
喘ぎ声を漏らしました。

ん♡すびん♡♡

ゴホ…
ゴホ…



私は、はしたなくお兄ちゃんに見られながら、イキました…。

「お兄ちゃん…先輩が…魔族に…助けてくれました？」

「当たり前だろ…」

あいつは衰弱してただけだから普通の個室で点滴受けてるよ。

アンナの無事を見届けるって聞かなかったけど無理やりな。

魔族は俺の蟲が繭にして今頃中でミイラになってるよ。

退魔師協会に持っていけば賞金ゲット。」

悪い魔族は賞金がかかっているのです。

お兄ちゃんはそのを退治して、生活してるのです。

かっ！いいです大好きです♡

あ♡

あ♡



「お兄ちゃん大好き♡
運命の糸で私のピンチが
わかったんですね？」

「いや…お前のスマホに細工して
アホな事したら
こっちにわかるようにしといたんだ。」

「うふふ♡お兄ちゃんは、
ストーリーしちゃうくらい
私の事好きなんですわ♡。」

「違う。お前はエサだ。」

ある時はイモムシのエサ。
そして今回は賞金首釣りのエサ。

アホに糸付けて泳がせば
かかると思っていたんだ。」

「私もお兄ちゃんのこと
ストーリーしてるくらい
好きですよ♡。」

「話を聞け」

そして事実ならいまずぐやめろ。」



「お兄ちゃん…
もし…私が…
普通の女の子だったら
結婚して
くれましたか？」

「ん…
しねえよ。」

「普通の子を俺みたいなの
魔族と関わる退魔師に
巻き込めねえよ…。」

私は帰りにお兄ちゃんの家へ寄って
それからいっぱいセックスをしています。



「じゃあお兄ちゃんと結ばれた
この身体でよかったです♡
もうひとつ…お兄ちゃん
私が修行して
ちゃんとした
魔女に
なったら。」

「相棒でも使い魔でも
メイドでも奥さんでも
何でもいから側に置いてくれますか?」

「…考えた」ともねえしわかんねえよ。」



「じゃあ私が魔法を使えるようになるまでに考えておいてください♡」

「こんな可愛い最強魔女絶対に他に居ないんですから考えるまでもないと思いますけど♡」

